

結縁の日めくり

その四

その人には見るべき姿も、威厳も、慕うべき美しさもなかった。

侮られ、棄てられた。

その人は哀しみの人だった。病を知っていた。

忌み嫌われるもののように蔑まれた。

誰も彼を尊ばなかった。

まことその人は我々の病を負い

我々の哀しみを担った……

イザヤ書 53 章

十字架上の死を通して

イエスの死は、まさに人間の自由と愛の行為の開示です。

しかし、弟子たちの目には、「みじめな救い主」の悲惨な死にしか見えなかったのです。“にわとり^{ひなたび}二度鳴くまえに汝^{みなたび}三度われを否まん” ペテロは、衆議会に捕縛されるかもしれない恐怖のあまり、主を棄てたユダと同様にイエスを裏切り、慙愧の念で、耐えかねてあたりかまわず慟哭しています。幾たびも伝道旅行を決行した使徒パウロでさえ、かつてはイエスの信奉者たちに否を突きつけ、迫害していました。

ゴルゴタ^{ゴルゴタ}の丘で奇跡を行なえなかった、無力なイエス。死に逝くとき、瀕死の状態
で師が語る言葉の真意を何人の弟子たちが理解していたのでしょうか。

“主よ、彼らを許したまえ。彼らはそのなせることを知らざればなり……”

“主よ、主よ。なんぞ我を見棄てたまうや”

“主よ、すべてを御手に委ねたてまつる”

詩篇 22 のダビデの歌より始まり、その 31 に受け継がれる神への全託の言葉を
呟きながら、イエスは息を引きとりました。弟子たちは、自分を見棄て、裏切
った者すべてに恨み言を一切口にしない無力な師の行為の結果に、限りなく深
い愛と慈しみを感じ、哀しみの衝動に打ち震えたのです。地上の過酷さの中に
残された人びとは、死者さえも復活せしめた「神の子」が死んでしまった驚愕

と溢れ出る不信仰の苦痛に、屈服させられた神を観ていたのかもしれませんが。‘沈黙する神’を前にして、神なき状態のままに留まっている私たちは懷疑の地平に立つばかりなのではないでしょうか。

ここにおいて、ようやく、ゴルゴダの秘儀（イエスの十字架上の死と三日後の復活の行為）が、結節点となって浮き彫りにされるようです。古代宗教の創始者たちは、人類の偉大なマスターとして、生涯の一時期、必ずと断言していいほど教えを説いています。しかし、本質的な意味では、イエスはキリスト教を布教していません。その説教のほとんどが他宗教のなかに存在しているのです。

「神の子」は、決して人間の自我に対して強制力を行使しませんでした。キリストは、肉体を持って堕ちてしまった天使である人間が、ある影響の下に、この地上で幻影にすぎぬ自我を形成したときから、悪と誤謬の闇の連鎖から逃れることができなくなっていたことを知っていたはずで、イエスが商人たちの椅子を引っ繰り返したという福音書の記述には、天空との相関関係を遮断して、地球にのみ呪縛してしまった、唯物論的世界観の中で功利的に生きる現代人への深いメッセージが込められていることに注視する必要があります。

愛と自由の宇宙である地球に降り立って、そこにみずからの血を捧げたキリス

トの光輝に本当に浸潤したいなら、進んで自分の自我という十字架を彼に投げ出すべきなのです。キリストは、無条件に人間を助ける神ではありません。自由な精神で彼を眼前に見、受け入れようとするときだけ、その霊的本性が、架空の自我に囚われた者に癒しを与え、救済と解放を個別に働きかけるでしょう。高次の存在たちは、絶え間なく波状攻撃の業にさらされている私たちを補佐しながら、決して意思の自由を奪おうとはしません。それが宇宙の掟なのです。賢明でも、善良でもなく、勝手気儘なことを行ない、墮落することの大好きな私たちが存在することこそ、人間に受肉したキリストの受難行為の意味があるようです。宇宙的に恵まれた今の時代、無限の可能性を秘めた人間に与えられた自由でリラックスした人生の体験を通じて、無償の愛が成就されるのです。この地球に棲息している人間が光り輝く霊体に絶えず進化し続けるとき、新生する、点にすぎない私たちの使命が達成されるに違いありません。

世界の運命に身を任せるような宿命論に陥ってはなりません。今必要なのは、無私なる精神に根ざした、遊びごろの生活の全体的深化と、独りきりの注意深い、醒めた眼差しに他なりません。というのも、来るべき日の予兆のためこそ、私たち一人ひとりはこの地上に降り立ったのですから。

